



じゃまくさいけど読む！「知ること＝知って・感じ・考えること」は大切です。
「世界のすべての子どもにペンと本を」その①
不屈の少女 マララさん

ノーベル平和賞受賞が決まったマララ・ユスフザイさんが2014年10月10日、英バーミンガムで行ったスピーチの詳細は次の通り。

ノーベル賞受賞者に選ばれて光栄です。この尊い賞、ノーベル平和賞を名誉に思います。最初のパキスタン人、最初の若い女性、最初の若者として受賞者となることを誇りに思います。私にとって非常な名誉です。

そして、この賞をインドのカイラシュ・サトヤルティさんと分かち合えて本当に幸せです。奴隷のような児童労働と闘い、子どもの権利を求める彼の素晴らしい活動に刺激を受けます。

子どもの権利のために多くの人々が取り組んでいて、私が一人ではないことは、本当に幸せです。彼は本当にこの賞にふさわしい方です。彼とこの賞を分かち合えることを名誉に思います。

ノーベル賞を頂く私たち二人は、一人がパキスタン、もう一人がインドの出身です。そして一人はヒンズー教、もう一人はイスラム教をあつく信仰しています。これは人々に愛のメッセージとなって届くでしょう。パキスタンとインド、異なる宗教の間で、私たちは支え合っています。

肌の色や話す言語、信じる宗教は関係ありません。互いを人間として尊重し合うべきです。そして、私たちは自分の権利、子どもの権利、女性の権利、全ての人の権利のために闘う必要があります。

最初に、私を愛し、支えてくれる家族、親愛なる父母に感謝したいと思います。父がいつも言うように、父は何か特別なものを与えてくれたわけではありませんが、父がしてくれたのは、私の翼を切らなかったことでした。

ありがたいことに、父は翼を切るのではなく、私を羽ばたかせて目標を達成させてくれました。女の子でも奴隷になるのが当然ではなく、人生を前進する力を持つ世界があることを教えてくれました。

女性は母親や姉や妹、そして妻であるだけでなく、自己を確立し、自分の人生を進むべきです。女の子は、男の子と同じ権利を持っています。たとえ、私の弟たちが、私がとてもよく扱われているのに、自分たちはそうではないと思ったとしても、それでもいいと思います。

私がノーベル平和賞に決まると、どうやって知ったか話したいと思います。

とても面白いことに、当時、私は化学の授業で陽極と陰極の電気分解の勉強をしていました。

時間は十時十五分だったと思います。ノーベル平和賞の発表はもう終わっている時間でした。まさか自分が受賞するとは思っていませんでした。十時十五分になったとき、受賞できなかったと確信していました。

すると突然、先生の一人が教室に入ってきて私を呼び、「大切なお話があります」と言うのです。彼女から「おめでとう。ノーベル平和賞に決まったわ。子どもの権利のために働いている偉大な人と一緒にね」と言われ、本当に驚きました。

感情を表現するのは時々とても難しいものですが、とにかく本当に名誉に感じました。自分がより力強く、より勇敢になったように感じました。なぜなら、この賞は身に着けたり、部屋に飾ったりするための金属片やメダルではないからです。

この賞は、私が前進するため、自分に自信を持つため、私の活動を支えてくれる人たちがいることを知るための励みとなるのです。私たちは団結しています。私たちは、全ての子どもが良い教育を受けられることを確実にしたい。だから、この賞は私にとって本当に素晴らしいものなのです。

でも、ノーベル平和賞受賞が分かったとき、学校を早退しないと決めました。むしろ、授業を終えようと。物理の授業に行き、学びました。英語の授業に行きました。全くいつも通りの一日でした。

先生や同級生の反応はともうれしかったです。みんなが私のことを誇りに思うと言ってくれて、本当に幸せでした。私を愛し、支えてくれる学校、先生、同級生に心から感謝します。みんなに励まされ、助けられていて、本当に幸せです。

みんなからの支えが試験に影響するわけではありません。それは自分の頑張り次第ですから。それでも、みんなに支えられていることが、私はうれしい。

受賞（の決定）が、終わりではありません。私の運動の終わりではなく、ここから始まりだと思えます。全ての子どもたちに学校へ行ってほしい。いまだに五千七百万人もの子どもたちが教育を受けられず、小学校にすら通っていません。全ての子どもに学校へ行って、教育を受けてもらいたいです。

私自身、（パキスタンの）スワト渓谷で同じ境遇でした。ご存じでしょうが、そこはタリバンの支配下にあり、学校に行くことが許されていませんでした。当時、私は自分の権利のために立ち上がり、声を上げると言いました。ほかの誰か（がどうにかしてくれるの）を待つことなく、自分が声を上げようと決めました。

そこには、二つの選択肢がありました。沈黙したまま殺されるのを待つか、声を上げて殺されるか。私は後者を選びました。当時はテロの恐怖があり、女性は家の外に出ることが許されず、女子教育は完全に禁じられ、そして人々は殺されていました。

私は学校に戻りたかった。だから、声を上げなければならなかったのです。私も教育を受けられない女の子の一人でしたが、学びたかったのです。勉強をして、将来の夢を実現したかったのです。

※君たちも3年後の18歳で選挙権が与えられる！後半へ続く